

「日本音楽学会国際研究奨励金」受領者報告書

神竹喜重子

一橋大学大学院言語社会研究科 特別研究員

一橋大学経済研究所 ロシア研究センター 科学研究費研究員

1. 発表学会について

シンポジウム名称：Symposium on Prokofiev and the Russian Tradition.

期日：2016年2月25日-27日

場所：Louisiana State University. College of Music & Dramatic Arts.

内容：作曲家セルゲイ・プロコフィエフの生誕125周年を記念し、またプロコフィエフの遺族より、プロコフィエフの未完の《ピアノ協奏曲第6番》がルイジアナ州立大学のピアニスト Michael Gurt 氏と Gregory Sioles 氏によって演奏されることとなり、企画されたシンポジウムです。企画者はロシア音楽研究を専門とする Inessa Bazayev 先生で、ルイジアナ州立大学音楽・演劇学校の助教を務めています。さらに、プロコフィエフの孫であり、現在イギリスを拠点に作曲家・DGとして活躍中のガブリエル・プロコフィエフ、ロシア音楽研究の大家であるリチャード・タルスキ先生、シモン・モリソン先生、ピアニストのフレデリック・チウ氏その他がゲストとして招かれ、ワークショップや講演、演奏会、マスタークラスなどをなさいました。

発表参加者は、"Reception of Soviet Music", "Prokofiev's Operas", "Prokofiev, Folk Music, Schnittke", "Russian Music Pedagogy", "Prokofiev and WWII", "Analyzing Prokofiev and Shostakovich", "Form and Analysis", "Film Music", "Russian Theoretical Writings", "Scriabin and Rachmaninoff"のセクションに分かれ、プレゼンテーションを行いました。

2. 研究発表要旨

セクション名称："Russian Theoretical Writings"

発表のタイトル：Marietta Shaginyan's "S. V. Rachmaninoff. Musical-Psychological Study" (1912): The Refutation against Ivanov's Dionysian Ideas

発表要旨：

◆発表の目的

これまで、ロシアの作曲家兼演奏家のセルゲイ・ラフマニノフ（1873-1943）に関する先行研究では、彼が20世紀初頭のロシア・モダニズムにおいて、その保守的な音楽様式故に、音楽批評家たちから「時代遅れ」と非難されていたとする見方が一般的である。しかし、実際には、ラフマニノフの創作を擁護する音楽批評家も確かに存在し、その中には、まさに後のソ連において、社会的に大きな影響力を有することとなる若き象徴派詩人・文芸評

論家のマリエッタ・シャギニャンがいた。

本プレゼンテーションの目的は、①シャギニャンが、モダニズムの一派である象徴派サークルに属しつつ、いかに「保守的な作曲家」ラフマニノフの擁護に至ったのかという経緯を明らかにすること、②彼女が 1912 年に執筆したラフマニノフ論考「S・V・ラフマニノフ——音楽心理学的スケッチ」を分析し、その美学思想上の独自性を明らかにすることにある。

◆シャギニャンとラフマニノフの交流の様相

1911 年、ペテルブルグ。シャギニャンは、象徴派サークルというモダニズムの一派に属しながら、同サークルの急進的な神秘主義的志向や現世を軽んじる傾向に違和感を覚えていた。一方、ラフマニノフは、モダニズムが最盛期を迎える中で、その保守的な作風故に、現代音楽推進派のカラトゥイギンらから辛辣な酷評を浴びせられていた。シャギニャンは、ラフマニノフを鼓舞すべく、1912 年 2 月に Re という名の手紙をしたためる。これを契機として二人の交流が始まり、やがて二つの歌曲集が生み出されていった。

◆『労働と日々』誌へのラフマニノフ論投稿——背景

1912 年 3 月、シャギニャンは、かねてより執筆しようと考えていたラフマニノフ論の構想を固め、象徴派サークルのムサゲド社へ向かう。そこで、『労働と日々』誌の編集長のエミリー・メトネルに会い、自分の論考の掲載を願うが、二人はラフマニノフを巡って激しい議論を交わす。メトネルは、モダニズム批判の点ではシャギニャンと一致しながら、ドイツ出自故にアリア主義的傾向にあり、その観点からラフマニノフを評価してはいなかった。しかし、最終的にメトネルはシャギニャンのラフマニノフ論考を認め、掲載に踏み切る。

◆「S. V. ラフマニノフ——音楽心理学的スケッチ」

シャギニャンは、まず、音楽がそれまでの伝統で獲得した芸術的本質を人間的仮象、つまりアポロン型要素と捉えており、モダニズムがその本質を破壊していると危惧する。彼女によれば、モダニズムは音楽を、ディオニュソス的なカオス（音楽が芸術性を獲得する前の段階）にまで退化させるものだった。これは、ブラヴァツキーの神智学に感化された作曲家スクリャービンや、その側近であり、シャギニャンと同じ象徴派サークルに属していたイワノフのディオニュソス崇拜への反駁を念頭に置いたものである。

こうしたモダニズムの「汎神論的同化現象」を危惧する一方、シャギニャンはラフマニノフの創作に注目し、彼の音楽においては人格性（アポロン型要素）が失われていないことを指摘する。またそれがロシア音楽の未来に繋がるという希望をも見出している。シャギニャンは、モダニズムの汎神論派に対比させてラフマニノフを有神論派と位置付け、さらにその観念を用いて、現代音楽推進派のカラトゥイギンらが主張する「ラフマニノフ＝チャイコフスキーの亜流」論への反駁も試みる。

◆結論

シャギニャンは、作品分析や作曲家紹介といった既存の形式を脱け出て、象徴主義的観

念論によりラフマニノフの創作にアイデアを見出し、現代音楽推進派のラフマニノフ批判に
対立する意欲的な試論を書いた。しかし、その真なる目的は、ラフマニノフ擁護というよ
りも、彼女の美学的思想に反するイワノフのディオニュソス論を、ラフマニノフの音楽を
理論武装として用い、反駁することにあつた可能性が大きい。それは、シャギニャンがこ
のラフマニノフ論を『労働と日々』誌に書いた時期が、ちょうど象徴主義グループの深刻
な内紛に当たること、またシャギニャンが音楽を論ずる際、イワノフのディオニュソス論
を示唆するテクニカル・タームを用いていることから考えられる。

3. 質疑反響と感想

発表の後に、以下のような質問を受けた。

- ①シャギニャンのラフマニノフ論考の反響は当時いかなるものだったか。他の音楽批評家
によって言及され、引用されることはあつたのか。
- ②ラフマニノフ自身は、シャギニャンの論考にどのように反応したのか。
- ③シャギニャンは象徴主義をどのように解釈していたのか。また、ラフマニノフにとつて
の象徴主義とは何だったのか。
- ④汎神論の対立項がなぜ有神論なのか。むしろ無神論ではないのか。
- ⑤シャギニャンの音楽的見解は根拠のあるものといえるのか。彼女の「有神論 vs 汎神論」
という二元論によって全ての作曲家が分類され得るのか。
- ⑥ほかにどのような議論が『労働と日々』誌上でなされていたのか。
- ⑦スクリャービンは汎神論だといえるのか。
- ⑧エミリー・メトネルはラフマニノフの評価を巡りシャギニャンと対立したのにもかかわ
らず、何故最終的に彼女のラフマニノフ論考を『労働と日々』誌に掲載することを承諾し
たのか。
- ⑨象徴主義グループ内に起きた内紛とは具体的にいかなるものだったのか。
- ⑩ラフマニノフとシャギニャンの交流過程で作曲された声楽曲、及びシャギニャンに献呈
された曲は何だったのか。
- ⑪アイデア（観念的価値）をラフマニノフの創作に見出す、というのは具体的にどのような
ことなのか。
- ⑫シャギニャンはキリスト教徒だったのか。
- ⑬象徴主義詩人を音楽批評家と捉えることは妥当なのか。
- ⑭シャギニャンのラフマニノフ回想や自伝において、時を経るごとに変化は見受けられる
か。

反響としては、これまでのラフマニノフ研究においてほとんど注目されてこなかった象
徴主義グループによるラフマニノフ論を取り上げたことで、当時のロシア音楽界のみなら
ず、象徴主義グループの中でどのようなことが起きていたのかを明らかにした点を主に評

価されました。しかし、質疑にあったように、シャギニャンをはじめとする象徴主義グループの音楽的見解は、宗教や哲学の要素を多分に含んでおり、純粋に音楽学的な議論ではないため、極めて曖昧な根拠による点、またその議論を真に受けて同じ土俵に乗ってしまう危険性がある点を指摘されました。

外国語によるプレゼンテーションを通じ、学んだことは、プレゼンテーション本体よりも、質疑応答に対する準備の重要さでした。同じ専門分野の先生方や研究者の方々がいらっしゃるため、質問内容も必然的に専門性を増し、かなり詳細なところまで聞かれたので、事前に考えられるだけの質問リストを自分で作り、答えを用意しておくことが大切であると実感しました。また、どのような質問をされるか分からないという緊張感に慣れておくためにも、学会・研究会の前に一度外国人の友人・知人の前でプレゼンテーションを行い、質疑応答の練習をしておくことも良いのではないかと思います。

日本音楽学会国際研究発表奨励金選考委員会様、住友生命保険相互会社様のご支援により、無事にルイジアナ州立大学音楽・演劇学校でのプロコフィエフ・シンポジウムで研究報告を行うことができました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。